The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創造から共創へ : ライプニッツ・九鬼・中井の哲学から
Author(s)	織田, 和明
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 29-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76147
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

創造から共創へ
―ライプニッツ・九鬼・中井の哲学から―

織田 和明

要旨

西洋を中心とする哲学の歴史において創造論は極めて重要な位置を占めるが、共創という概念はあまり論じられてこなかったように思われる。本論では、G. W. ライプニッツと九鬼周造の哲学を創造という観点から検討し、そして中井正一の思想を参考にしながら共創を探求する理由とその方向性について考察する。

ライプニッツは苦しむ人間に配慮することなく最善世界を1人で創造する冷酷な全知全能の神を考えた。九鬼は到来する偶然を受け止めながら神秘の瞬間にマクロコスモスと共鳴するミクロコスモスのはかない美に瞬間的な共同性を求める孤独な人間を描いた。中井は集団的主体のあり方について研究し、そして様々な形で実践した。それは技術を用いて集団において積極的に他者と協力しながら創造していく方法である。より対等なもの同士の関係性の中でなされる創造としての共創に必要なものは中井が研究し、実践したような、人々が各々の能力を存分に発揮し、持続的に発展していく組織である。共創学の課題は共に創造できる機構を組織するための技術を探求することであり、そのための技術こそが我々の求める共創知である。

目次

1. 共創へ向かって
2. 全知全能の神と不幸な人間と最善の世界
3. 無能な神と創造する人間
4. 集団的主体による実践
5. わからないことだらけだし、天才でもないし、はかない瞬間だけで良いわけでもないから

キーワード

共創
G. W. ライプニッツ
九鬼周造
中井正一

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター；odakazuaki@hus.osaka-u.ac.jp

1. 共創へ向かって

哲学を研究する身としては共創という語に若干の戸惑いを感じてしまう。西洋を中心とした哲学の歴史を振り返ると、創造論はその最重要課題の一つとして現れる。しかし私たちが本論で検討するような共創という概念はこれまであまり明示的には論じられてこなかったようである。本論で検討する共創はCo-creationを指す語であるが、そもそも創造Creationとは『創世記』にある天地創造のような世界の創造を指す語である。そしてユダヤ教・キリスト教・イスラーム圏では唯一で絶対的な神の下での世界の創造が信仰されてきた。パウロの「ローマの信徒への手紙」の「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」(第十一章第三十六節)[1]が端的に示すように、一神教の世界では創造は第一には神に帰される。被造物である人間は、摂理に従って絶対的な神の下で創造に協力するのである。それを神と人間の共創と考えることもあるだろう。しかし様々な背景を背負って生きる人々が共に生きる現代では、伝統的な絶対者と被造物のような圧倒的な立場の違いの中にある創造よりはむしろ、より対等なもの同士の関係性の中でなされる創造としての共創が求められている。

またキリスト教の絶対的優位が緩んだ近代以降、神の影響下から完全に脱した純然たる人間の行為としての創造も論じられるようになっていく。そして現代では人間が芸術作品や人工物を創造したと頻繁に言うようになり、「クリエイター」という職業を名乗る人も現代では珍しくなくなった。この創造は多くの場合一人、せいぜい数人の天才による革新的な創作に与えられる。しかしいかに天才といえど多様化し複雑となった現代社会の諸問題を1人ないしは数人で解決することはほとんど不可能である。現代に生きる私たちに最も求められているものは、やはり共創である。本論ではゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ(1646-1716)、九鬼周造(1888-1941)、中井正一(1900-1952)の思想の検討を通じて私たちが共創を求める理由とその方向性について論じる。

2. 全知全能の神と不幸な人間と最善の世界

本論文で最初に注目するのは17世紀から18世紀のドイツで哲学・数学を始めとして数多くの分野で優れた業績を挙げ、政治家、外交官などの実務家としても活躍したG. W. ライプニッツのユニークな創造論である。ライプニッツは主要著作の1つである『弁神論』(1710)の本論の最後に王政ローマ最後の王タルクィニウス・スペルブスの息子であるセクストゥス・タルクィニウスを主人公にした短い物語を記した[2]。彼が親類の妻ルクレティアを凌辱したことがきっかけで反乱がおこり、父であるローマ王が追放され、共和制ローマが成立したと言われている。ライプニッツはこの伝説を踏まえて彼を主人公にした短い物語を創作し、多岐にわたるライプニッツ哲学の中でも最も有名な議論の1つである最善世界説を提示している。

デルフォイに神託を受けに行ったセクストゥスは、アポロンから罪を犯してローマを追われ没落した挙句殺されると告げられる。セクストゥスはアポロンに文句を言うが、アポロンは、自分はただ予告をするだけである、文句があるならばユピテルのところへ行けと言う。セクストゥスは、なぜユピテルは罪を犯すものとして自分を創ったのか、私は神の意志に反抗することはできないのかと問い続ける。対するアポロンは、汝は汝の本性に従って行動して罪を犯すだろうと予告を繰り返す。ユピテルのところへ赴いたセクストゥスはユピテルに、なぜ自分は悪人となるのか、自分がローマで善き王となることはできないのかと文句を言う。ユピテルは、セクストゥスがローマを離れるならば別の運命が紡がれて幸福になることができるが、セクストゥスがローマで善き王となることはできないと告げる。セクストゥスはローマを去る決心ができず、結局自身の悪人となる運命に身を任せる。セクストゥスとユピテルの対話に立ち会っていたテオドロスはユピテルがセクストゥスにローマを離れる意志を与えなかった理由を尋ねる。するとユピテルはテオドロスに女神パラスのもとへ行くように告げる。テオドロスはパラスにピラミッド型の運命の宮殿を見せられる。運命の宮殿の各部屋は現実化しうる可能世界となっている。ある部屋のセクストゥスはユピテルの神殿を出た後コリントスに赴いて幸せになり、別の部屋ではトラキアに赴いて臣下から敬愛され

る王となる。しかしピラミッドの頂点にある最も美しい部屋ではセクストゥスはローマでルクレティアを凌辱し、追放される。セクストゥスが罪を犯す運命にあるかもしれないが、しかしセクストゥスの罪は大局的にはローマ帝国を築く役に立っており、それゆえこの部屋こそが最も完全性の高い最善の世界となっている。ユピテルは全知全能の神であるため、セクストゥスが悪人となり追放される最善世界を現実の世界として選ぶしかないのだとパラスはテオドロスに教える。ここで注意すべきはセクストゥスが自らの意志で悪人となったと述べられていることである。「形而上学序説」(1686)の13節などで説明されているように、出来事は神と被造物の自由意志に基づいた、確実ではあるが偶然的なものとされる。神が最善の世界を選ぶというのは世界を最善へと強制することではなく、神はその完全なる知に基づいて最善となるように「傾ける」のだとライプニッツは考える[3]。彼がこの物語で最も主張したいことは神と人間の自由意志と神の完全性の両立である。

こうして最善世界においてセクストゥスは罪を犯す運命を選び、ルクレティアを凌辱し、追放される。怒りや悲しみに暮れる被害者たちは最善世界における犠牲となる。あなたは不幸かもしれないが、神は最善の世界を創造した。あなたが幸せになる可能性はあるが、それは世界全体の完全性を損なうものであるから、現実化できない。そしてあなたの引き起こした罪や被害者の不幸は、人間の自由意志に基づいた行為の結果である。神はこのように主張するとライプニッツは考える。この物語は現代ではただの与太話に聞こえるかもしれないが、しかしその含意するところは深遠で、今もライプニッツの最善世界説を巡って様々な研究が続けられている。ライプニッツは17世紀のカトリックとプロテスタントの悲惨な宗教対立のただ中でなぜ全知全能の神がいるにも関わらず世界には不幸や悪が蔓延しているのかという問いを真剣に考え、最善世界説に至る。神の完全性を守りながら同時に個人の自由を担保することがライプニッツの目的であったが、この物語はそれをある程度達成している。全知全能の神であるユピテルは自身の完全性に従って、セクストゥスの文句を聞き入れることなくただただ最善の世界を創造する。なぜセクストゥスの文句を聞き入れないのか、ルクレティアは凌辱されねばならないのかと完全性に劣る人間は思うかもしれないが、それを聞き入れることは結果

として世界を毀損することにしかならないと神だけが知っている。全知全能という厳格なルールに、一切の妥協は許されない。しかしこの全知全能の神は苦しむ人間に対してあまりに冷淡ではないだろうか。

このライプニッツの創造論は必ずしも評判が良かったものではなく、彼は当時の最も高名な神学者、哲学者の1人であるアントワーヌ・アルノー（1612-1694）から書簡で批判されている。アルノーは、神が認識するようなしかたで探求することは人間が哲学をする態度ではなく、神が全知であることを人間は知っているにしても、そのありようについては全く理解が及ばないものであることをわきまえるべきだと主張する[4]。これについては19世紀から20世紀にかけて活躍したフランスの哲学者アンリ・ベルクソン（1859-1941）も同意するものであったようで、講義でアルノーの書簡を引用し「神は存在の中心ではあるが、神を認識の中心とする権利はないのだ」[5]と言う。

私もアルノーとベルクソンの批判に倣っておきたいと思う。私たちが考えるべきは人間のありようである。最善を知らない私たちはライプニッツの神のように一切の文句を聞き入れることなく1人で世界を傾け、創造するものではない[6]。ただ私たちの理解の及ぶ範囲で、私たちのできるかぎりでの最善を求めるべきである。それは誰かに犠牲を強いる残酷なものであるべきではない。私たちのなすべきは人間には決して理解されえない最善に向かって、話し合いを通じてそれぞれのパースペクティブを突き合わせながら協力していくことである。「あなたが不幸な最善の世界」ではなく「あなたが幸福で最善の世界」を、それがたとえ不可能なものであっても、求めることが不完全な人間による共創への第一歩である[7]。

3. 無能な神と創造する人間

ライプニッツの哲学を高く評価しながらも同時にそれを強く批判したのは近代日本を代表する哲学者の1人として知られる九鬼周造であった。彼は1934年の論文「人生観」で神について以下のように記している。

従って私の考えている神とは人間の行為を傍観して人間に賞罰を与える

> ような神ではない。人間全体と共に悲しみ人間全体と共に喜ぶ神、人間全体の中に住む神、人間即神である。（KSZ, 3, 102）

神が望むことは「最大多数の最大幸福」であり、それはつまり「一切の人間が最高善を享楽すること」[8]だと九鬼は主張する。九鬼が想定する神は全ての人間を等しく愛し、その幸福を願うものである。ライプニッツの描いたような一部に犠牲を強いながら神にしかわからない最善へと世界を導いていく神とは一線を画している。つまり「あなたが不幸な最善の世界」ではなく「あなたが幸福で最善の世界」を望む神なのである。しかし実際には最高善を享楽できていない人間は大勢いるというライプニッツが直面した課題も、九鬼はわかっている。

> 最高善としての最大幸福は余りにも多大の不幸と余りにも深甚な苦悩とを予想するではないかと問うならば、神は黙って答えないかもしれない。（KSZ, 3, 104）

九鬼の考える神は現実の不幸の前で黙りこくってしまう。それは絶対者にしてはあまりにも無能かつ人間的で、ただ傍らで優しく幸せを願ってくれるけれど決して助けてはくれない存在である。ライプニッツならばそれを神とは呼ばないだろう。あまりにも無能な神しか描けない九鬼の哲学において絶対者はほとんど何もせず、世界は人間が悪戦苦闘する場所となる。そのような哲学観において創造は人間の手に渡る。

九鬼が初めて出版した論考である「時間の観念と東洋における時間の反復」（1928）に創造についての言及が見られる。この論文で九鬼は東洋的な時間論として永遠回帰を議論する。ここで注目したいのは時間の回帰の方法について説明している箇所である。九鬼は人間が「意志のわざ」で新たな時間を創造し、新たな時間へと飛び移るのだと主張する[9]。この回帰する人間は「傍観者」に見守られることなく自らの意志によって時間を創造し、回帰を成立させる存在であり、九鬼はその人間を絶対的孤独のうちにある「魔術師」と呼ぶ[10]。この「傍観者」は神の婉曲表現であるから、ここで九鬼が主張しているのは、世

界は孤独な人間の強靭な意志によって創造されるということになる。

「時間の観念と東洋における時間の反復」はフランスで発表された論考で、神から自立した人間の意志を中核に据えた哲学を東洋、特に日本の思想の特徴として提示しようという九鬼の大胆な意図がうかがわれる点で興味深いのであるが、この創造論はその核心部が「意志のわざ」や「魔術師」といったマジックワードでごまかされている。絶対的に孤独な魔術師の意志の力で世界が創造されるというのは、神の代わりに神のような人間が摩訶不思議な「意志のわざ」で世界を創造したということにしかならない。もちろん人間は世界の中で現実に生きて死ぬ有限な存在であるから、ライプニッツの考えるような全知全能で、神殿で最善世界を選んでいる神とは異なる。とはいえ優れた能力を持つ存在が1人で世界を創造するという点ではライプニッツの神と九鬼の「魔術師」は大差ない。

この魔術師の「意志のわざ」による世界の創造はこの論考以降は九鬼の哲学に登場しない。その後の九鬼はむしろ「偶然性」についての思索を深めていく。そして世界の根本は偶然であり、様々な出来事や存在は究極的には偶然ではあると主張することになる[11]。その時には無数の可能な世界の中から偶然この世界が現実となったという発想が九鬼の基本テーゼとなる[12]。ゆえに九鬼はライプニッツが無数の可能世界を想定したことを高く評価しつつも、その可能世界を最善説によって唯一の世界へと収れんさせたことを批判する[13]。神が最善世界を選んだわけでもないし、魔術師が強靭な意志で世界を創造したわけでもなく、たまたまこのように世界はなったと九鬼は考えるようになる。理由や因果の彼方から、世界は到来してくる。人間はただ現実化してくる世界に振り回されるしかない。この偶然性の哲学の創造論には意志を持って創造する神や人間はいない[14]。ただただ何かが現れてどうしようもなく迫ってくる。それゆえ世界の究極的な根拠のことは「原始偶然」[15]とみなされる。その現れた偶然の世界を理由や因果の系列でまとめ上げて必然なものへと整理していくのが人間の「行為」である。九鬼の主著『偶然性の問題』の「結論」では次のように論じられている。

偶然に対する驚異は単に現在にのみ基礎づけられねばならぬことはない。

> 我々は偶然性の驚異を未来によって倒逆的に基礎づけることが出来る。偶然性は不可能性が可能性へ接する切点である。偶然性の中に極微の可能性を把握し、未来的なる可能性をはぐくむことによって行為の曲線を展開し、飜って現在的なる偶然性の生産的意味を倒逆的に理解することが出来る。「目的なき目的」を未来の生産に醸して邂逅の「瞬間」に驚異を齎らすことが出来る。そして、一切の偶然性の驚異を未来によって強調することは「偶然―必然」の相関を成立させることであって、また従って偶然性をして真に偶然性たらしめることである。（KSZ, 2, 259）

ここの「倒逆的」は回顧的にという意味である。現れた偶然に対して人間は様々な対応法を見る。その中のある可能性が行為され、未来の現実が生産されていく。しかしその行為の最中に思い描いていた通りに物事が現実化するかというと、そうでもない。様々な要因に左右されながら偶然にある結果へと結実していく。だが、行為が終わった後に振り返ってみるとその時の偶然な出来事や行為はまさにその結果へと導くものであるかのようにつながって見える。私たちは必ずしもその目的に向かっていたわけでもないのに、あたかもその目的に向かっていたかのように回顧し、偶然の出来事を理由や因果の系列でまとめ上げて必然にしてしまう。だがこのような系列になったという驚異、そしてこの系列があるという驚異はどこまでも消えない原始偶然であり、それこそが新しい未来を生産する力となる。

この系列を形成する偶然の契機のことを九鬼は「邂逅」と考える。異なる系列にあった人間や出来事、事物―九鬼はそれを象徴的に「汝」と呼ぶ―が偶然に「我」と出会うことによって諸系列たちが結びつけられ、新たな系列を形成していく。離散的にあったものが結び付けられてネットワークを形成していくのである。これが人間の邂逅の場合ならば、「我」が「汝」と出会うことによって孤独を脱し、社会を形作ることとなる。この邂逅はそれぞれ別々にあったものたちが偶然の出会いを通じて新たなものを生み出す契機である。それゆえこの始まりの瞬間である邂逅において原始偶然は強く認識される[16]。

この邂逅を最もよく表現する芸術は詩の押韻であると九鬼は考え、音と音との偶然の邂逅による美として詩における押韻の美しさを論じる。そして今

の日本語の詩には韻を踏む習慣がないが、ぜひ日本語の詩にも押韻を導入するべきだと熱心に主張し、偶然の美を取り入れて生の鼓動を詩に象徴化するような日本語の詩を期待する[18]。そのときに参考にされているのは数理哲学、様相論理学、そして美学の分野で広く活躍したドイツの現象学者オスカー・ベッカー(1889-1964)のはかないものとしての美をめぐる議論である[17]。ベッカーは、美は「はかない」ものだと主張する。美はそれ単体では潜在的なものであるが、美的体験や作品において現実化すると彼は考える。では美がどこに潜在しているのかというとそれは宇宙の運命、言い換えるとマクロコスモスである。そして現実化した美的体験と作品はマクロコスモスと呼応したミクロコスモスを形成する。それは完璧なミクロコスモスであるがゆえに外部の日常性から独立して「尖端」を行くものであり、非常にはかなく壊れやすい。このはかない美を表現する作品を創造する芸術家はマクロコスモスである自然と芸術作品の間で橋渡しをする中間的な存在である。この形而上学的で潜在的なマクロコスモスをこの世界の作品に現実化する芸術家の性格をベッカーは「冒険的性格」と呼ぶ。そして芸術家の「イロニーの眼つき」は「永遠の現在」にあるマクロコスモスと「それ自体において無」であるはかないミクロコスモスの間を結ぶ「世界を愛する」契機を見るものとされる[19]。

九鬼はベッカーの議論を永遠の相にある潜在的な美が詩における偶然の音の邂逅によって現実化し、詩にはかないミクロコスモスを形作ると読み替える[20]。そして押韻を「生の鼓動」の象徴と位置づけていることが示唆するように、ベッカーには希薄だった大きな生命としてのマクロコスモスへの目配りが九鬼にはある。偶々邂逅を果した音の結びつきによって形作られるはかなくも生き生きとした韻文詩にミクロコスモスの生命の美が位置づけられている。

九鬼の考えに従うならば、偶然の音の邂逅による結びつきによって生まれる音韻の美は異なる系列間の偶然の邂逅によって新たに生まれるものである。だがこれを共創と呼ぶことには、私は躊躇する。韻文詩におけるこの音の邂逅はマクロコスモスと共感して作品を制作する冒険的な芸術家、あるいは詩人によって創作されるものであるから、共創というよりはむしろ、マクロコスモスと共感する芸術家／詩人による単独での創造である。九鬼は詩人が意

図的に韻を踏ませたのではなく、たまたま音が邂逅して韻を踏ませたと解することによって詩人の受動性を際立たせ、作詩における外的要素を強調しているが、しかしそれが個人の特別な創作であることは否めない。そして一般的には、韻文詩の作成は奇跡的な偶然の音の邂逅を待つことというよりはむしろ、地道な研究や辞書等を活用した推敲から生じる技術の賜物である部分が大きい。本当は相当に技術的な作業である押韻の作成をあたかも偶然の出来事であるかのように論じた点に九鬼の哲学の特徴が良くも悪くも現われている。ここに徹底的な受動性の先にある能動性という九鬼の行為論を見ることができると同時に九鬼の哲学の最大の空白として「技術」という観点の不在を指摘することもできるだろう。この技術の不在こそが九鬼の哲学に神秘性とはかなさという特徴を与えると同時に、それを共創から一歩遠ざけている。技術なしで偶然訪れる神秘の瞬間を待つという姿勢ゆえに、九鬼は個と個のはかない邂逅をあっという間に神秘的な大きな生命としてのマクロコスモスの永遠性へと結びつけ、個と個よりもむしろ個と全体の関係に関心を向けてしまう。それはどちらかというと人と絶対者の間の神秘的な関係に近く、ゆえに私たちが目指す対等な人間同士の関係性の中でなされる創造としての共創とは別の方法である。

九鬼は全ての人間を等しく愛し、その幸福を願いつつも現実の不幸の前で黙りこくってしまう、あまりにも無能で優しい神を考えた。それゆえにまず意志の力で世界を創造する孤独な魔術師としての人間を提示した。次に偶然性についての研究を深めた九鬼は世界の究極的な根拠は「原始偶然」であるとした。そして新しい系列を生産していく契機を「我」と「汝」の偶然の邂逅に求めた。押韻論では、ベッカーの議論を参照しながら、音と音の偶然の邂逅においてマクロコスモスと呼応するミクロコスモスとしての詩の押韻のはかない美を主張した。九鬼の哲学の軌跡は神の力が失墜した後の人間による創造、生産論の模索であった。神のように創造する人間から、偶然の創造に振り回される人間へと論は変更され、潜在的な生命の美を偶然の邂逅に表現する詩人を希求するに至る。しかし技術という観点を持たない九鬼の到達した地点はあまりに神秘的で、そして孤独である。そして創られる美ははかなく壊れやすい。九鬼やベッカーも一つの方法を示しているのではあるが、しかしこ

こで彼らの思想から反転して、人間が共に世界を創造していくことへと私たちは向かわなければならない。

4. 集団的主体による実践

同時代における九鬼周造の哲学の最良の理解者は中井正一であった。彼は美学者であると同時に様々な活動に取り組んだ実践家である。戦前は1936年の「委員会の論理──一つの草稿として」をはじめとする美学、哲学の論文を執筆しながら同時に自身が最も新しい芸術として注目していた映画の制作や反ファシズム運動に取り組む。1937年に治安維持法で検挙され、1940年に懲役2年、執行猶予2年の判決を受ける。1945年からは尾道市立図書館館長として市民教育に精力的に取り組み、そして広く市民の支持を得て1947年の広島県知事選挙に立候補するが、それには落選してしまう。しかし実績を高く評価されて1948年には国立国会図書館副館長に、翌49年には日本図書館協会理事長に就任し、戦後日本の図書館の基礎作りに奔走する。その間も執筆に励み、1951年には代表作『美学入門』を出版している。そしてその翌年の1952年にガンで亡くなる。ギリシア哲学から20世紀までの歴史を広く俯瞰し、それぞれの時代の社会と哲学、そして美の連関を説いていく中井の思想は美学であると同時に哲学であり、そして社会論であった。中井は歴史の流れを意識することで同時代の先輩研究者であるベッカーや九鬼の哲学の長所も短所も深く理解し、厳しい時代の動向や自身の実践に根ざした思想を論じる。九鬼の『「いき」の構造』を明らかに意識しながら中井は「スポーツ気分の構造」や「スポーツ美の構造」などを執筆し、そして九鬼の「いき」を踏まえて中井は「気」を研究している。しかし中井は九鬼とはむしろ真逆の方向に、つまり個人主義ではなく集団主義の哲学を論じるのである。ゆえに中井は1932年の「リズムの構造」で九鬼やベッカーの名前を直接挙げずにベッカーを踏まえた九鬼の音韻論を紹介し、そして以下のように批判する。

> 瞬間への信仰的な愛着。執拗な個人性への付着。はかない偶然性への戯れの驚き。かかるものがすることのなくなった個人主義文化の美しい幻

である。（NMZ, 2, 35-36）

しかし、かかるすべてのものはすでに個人主義文化における、否定されたる自我、孤独なる自分、距てられたる個人の上に成立するところの様式である。

今、しかし、すでに、その分裂の上に、さらにより大きな分裂が、その重圧を加えつつある。（NMZ, 2, 36）

中井にとって九鬼の音韻論は既に分裂して失われてしまったロマン主義的な強い個人が偶然の邂逅において回復するという美しい幻想を追い求めるものに見える。しかし自我の分裂はそのような幻想では覆い隠せないほど大きくなっていると中井は考える。このように個人主義を批判する中井は古代ギリシアやドイツロマン主義などと対比しながら自身の生きる時代を描写し、集団主義の時代が到来していることを告げる。「リズムの構造」と同じ1932年の「思想的危機における芸術ならびにその動向」では以下のように記されている。

ギリシャにおいて芸術の特殊性が考察された時、始めにプラトンにより、ついでアリストテレスによって指摘された概念は技術Technēであり、また模倣Mimēsisであった。ロマン的個人主義がこれらの概念の否定より出発して、芸術論を、技術の概念に対する天才の概念、模倣の概念に対する創造の概念の上に成立した。そして、ギリシャにおいては美は真と善なる普遍的実在の下に第三の帝国として存在するにすぎないのに反して、ロマン派的考えかたは、美をもって人間本来の課題として、美の独立を主張した。ニイチェはその流れの奔湍であり、カントはその源泉となった。…（中略）…しかし注意すべきは、この新しき芸術観、すなわち天才と創造と美の概念は、個人主義勃興期に確立された時は、封建主義への叛逆の武器として、実に正当な権利を保持したるにもかかわらず、天才と独創と美の概念はついにややもすれば、放恣と個人性と非真実性とに仮託的重要さを貸し与えるの危険性をはらんできた。今の純粋芸術

> の没落とよばれているところのものは、かかる放恣と個人性と非真実性ののぞんでいるところの危機を指すのである。（NMZ, 2, 48-49, 強調原文）

古代ギリシアの哲学では芸術は模倣の技術であり、また「美」は「真」や「善」といった普遍的実在と比べると一段劣るとみなされていた。しかし近代のロマン主義的個人主義では「美」は「真」と「善」と対等な人間本来の課題であり、芸術は模倣の技術ではなく天才による創造だと考えられる。ロマン主義的個人主義は封建的な支配[21]を打破するに際しては有効であったが、現代では、天才は放恣へ、独創は個人性へ、普遍的実在は非真実性へ堕してしまっていると中井は説く[22]。ではなぜ近代の天才・独創・唯美は放恣・孤立・非真実に陥ってしまうのか。それは「時代の文化が個人の才能をもって覆いつくせぬまでに分化発展している」[23]からである。ある分野の専門家は他の分野においては素人[24]でしかなく、個人は利潤によって駆動される組織の一部の機能を担う機械となる[25]。

中井は個人主義の時代は文化の発展と資本主義の展開によってあっさりと終わり、巨大な機構が中心の集団主義の時代になっていることを告げた。個人は機能（函数）として集団の中で各々の役割を果たしながら生きることになる。中井は機能主義社会の問題点を理解しつつも[26]、必ずしもそれを否定的には捉えない。利潤に駆動されない機構に中井は新しい時代の可能性を見る。中井は機械の組織の統制された技術美にこそ近代的な美があると論じる[27]。中井にとって技術とは自然の因果系列を人間の秩序の系列へと結合することであり、現実／非現実、可能／不可能、偶然／必然を転換するものである[28]。ものの様相を変え、個人ではできなかったことを実現していく組織化の技術にこそ自我分裂の時代の人間の生き方があると中井は考える。それゆえ彼が取り組んだのはむしろ、スポーツ活動を通じた集団的主体による実践の論理や集団で考える方法である「委員会の論理」の研究、集団主義時代の芸術である映画の実作と研究、反ファシズム運動や彼自身が実践の「その尤なるもの」[29]とした選挙であり、国立国会図書館副館長として日本の知を整備することであった。つまりは個人を技術によって組織化し、集団でパフォーマン

スすることにある近代的な美を彼は理論と実践の両面から求め続けたのである。

孤独な哲学者を自任していた九鬼周造から最も深く学んだ中井が集団論を研究したことは意外に思えるかもしれない。しかし両者はともにロマン主義的個人主義が終わり、自我分裂の時代が到来したことを理解していた。九鬼はそれを偶然性の哲学として表現し、押韻詩のはかない美によって克服しようとする。つまり分断されてしまった部分と部分を偶然の邂逅の瞬間にマクロコスモスと共鳴させることによって、形而上的に仮想される神秘的な全体を形而下のミクロコスモスに現わそうとするのである。一方の中井は強く九鬼の影響を受けつつも、自然の因果系列を人間の秩序の系列へと結び付け、様相を転換する技術という概念を用いることによって弱い個々人を組織化し社会で仕事をするための理論を探求し、実践し続けた。万能の天才がいなくなり、部分しか担いえない弱い個人が構成する集団的主体による制作が主流となった時代の、集団の仕組みと集団による創造の可能性の具体化に中井は努めた。個人主義の終焉という危機を九鬼ははかない一瞬の内に現れる永遠にかけることで、中井は組織化によって新たな道を切り開くことによって克服する[30]。

5. わからないことだらけだし、天才でもないし、はかない瞬間だけで良いわけでもないから

本論ではライプニッツ、九鬼周造とオスカー・ベッカーそして中井正一の哲学を手引きとしながら共創に至る理由を探求してきた。ライプニッツは全知全能の神が最善世界を創造すると考えた。その最善世界であっても不幸な人間は存在するが、しかし神は一切の人間の苦しみに配慮することなく神のみぞ知る最善世界を創造する。九鬼は全ての人間を等しく愛し、その幸福を願いつつも現実の不幸の前で黙りこくってしまう、あまりにも無能な優しい神を想定した。そして九鬼はライプニッツのようにこの現実化した世界が最善であると考えずに、人間が悪戦苦闘する場所としての世界を論じた。初期には意志の力で世界を創造する孤独な魔術師を想定していたが、偶然性の哲

学においては偶然の創造に振り回されるものとして人間を描き、偶然の邂逅の美を柔軟に受け止めて永遠がこの世界に受肉する瞬間を言葉に表現する詩人を希求することとなった。九鬼の理論はライプニッツの神による創造よりも優しさにあふれ、他なるものに開かれてはいるが、それでもやはり神秘的で孤独なところからのはかない美の創造である。中井正一は万能の天才がいなくなった時代における集団的主体のあり方について研究し、そして様々な形で実践した。それは技術を用いて集団において積極的に他者と協力しながら創造していく方法である。私は中井の思想こそが共創だったのだと思う。

最善がわかる神は誰の話も聞かずに1人で創造する。だが、私たちはわからないことだらけの人間であり、現代は優れた天才が社会全体を見通して素晴らしい創造をすることができると期待できる時代ではない。苦しむ人の声を聞き、それを反映させた実践を計画し、実行しなければならない。孤独な人間は到来する偶然を受け止めながら神秘の瞬間にマクロコスモスと共鳴するミクロコスモスの美を求めた。それは形而上学的な美による瞬間的な共同性ではあるが、はかなく壊れやすいものである。しかし共創に必要なものは他者と向き合い、人々が各々の能力を存分に発揮し、持続的に発展していく組織である。共創学の課題は共に創造できる機構を組織するための技術を探求することであり、そのための技術こそが我々の求める共創知である。

注

1　日本聖書協会「ローマの信徒への手紙」『聖書　聖書協会共同訳―旧約聖書続編付き』（日本聖書協会）2018年、（新）286頁。

2　以下の「弁神論」のセクストゥスの物語は以下の邦訳を参照した。

ライプニッツ, ゴットフリート・ヴィルヘルム著「弁神論―神の意志、人間の自由、悪の起源」『ライプニッツ著作集第Ⅰ期第7巻　宗教哲学『弁神論』下』下村寅太郎・山中信・中村幸四郎・原亨吉監修、佐々木能章訳（工作舎）1991年、149-160頁。

3　ライプニッツ，G. W.『形而上学叙説　ライプニッツ―アルノー往復書簡』橋本由美子監訳、秋保亘・大矢宗太朗訳（平凡社）2013年、31-36頁。

4　ライプニッツ，G. W.　同書、148頁。

5　Bergson, Henri. *Histoire de l'idée de temps: Cours au collège de France 1902-1903*.（Paris: PUF）2016, p. 305.（ベルクソン，アンリ『時間観念の歴史　コレージュ・ド・フランス講

義　1902-1903年度』藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳（書肆心水）2019年、298頁。）

6　当然ながら本論でのライプニッツ批判は壮大なライプニッツの創造論の一部分に対する「いちゃもん」である。ライプニッツの創造論の本領を知りたい方は例えば以下の詳細な研究を参照してください。

根無一信『ライプニッツの創世記：自発と依存の形而上学』（慶応義塾大学出版会）2017年。

7　ジミー・エイムズさんに、多くの人と交流しながら哲学、数学をはじめとするあらゆる分野の理論的研究から政治、外交まで幅広く活躍したライプニッツはまさに共創の人ではないかとご指摘いただいた。本稿ではライプニッツの『弁神論』だけを取り扱ったためにその理論は共創のものではないと批判することになってしまったが、しかしエイムズさんのご指摘の通り、ライプニッツの数々の業績はまさに共創の成果である。本稿ではそれを論じることはできないので、関心のある方はライプニッツの膨大な著作や書簡の研究に挑んでいただきたい。

8　「人生観」（K, 3, 103）

9　新たな時間を創造したならばそれは回帰ではないように思われるかもしれない。この点に九鬼も思い至ったのか、この創造論は「時間の観念と東洋における時間の反復」にしか現れない。

10　「時間の観念と東洋における時間の反復」（KSZ, 1, 289(60)/406）

11　「偶然性と驚きの情」（KSZ, 3, 172-176）など。

12　「偶然化の論理」（KSZ, 2, 371-373）

13　（K, 3, 159-160）

14　小浜善信が九鬼の神はサイコロ遊びのような偶然の戯れの中で世界を創造する「遊戯する神」であると論じていることも思い出しておきたい。小浜は形而上学的な世界を総覧する神の視点を重視しながら九鬼の哲学に臨むため「遊戯する神」に論を結実させるが、本論では形而下に生きる人間の視点を重視して九鬼の哲学に臨むので、むしろ九鬼が「原始偶然」を神と結びつけることに積極的ではなかった点に注目する。

15　もともとはドイツ観念論を代表する哲学者の1人であるフリードリヒ・シェリング（1775-1854）が提唱した概念であるが、九鬼はそれを相当に改変して使用している。

小浜善信『九鬼周造の哲学：漂白の魂』（昭和堂）2006年、158-201頁。

16　そもそもありとあらゆる瞬間は原始偶然であるが、その中でも新たな系列の成立が目撃された瞬間としての邂逅は、独立した系列の始点であるがゆえに原始偶然として人間に認識されやすい。

17　九鬼が参照しているのはベッカーが1929年に『哲学および現象学研究年報』のフッサール生誕70周年記念号に発表した「美のはかなさと芸術家の冒険的性格について」である。現在では以下の本に収録されている。

Oskar Becker, “Von der Hinfälligkeit des Schönen und der Abenteuerlichkeit des Künstlers.”

Dasein und Dawesen. (Pfullingen: Neska) 1963, 11-40.（ベッカー，オスカー「美のはかなさと芸術家の冒険的性格について―美的現象の領域での存在論的研究―」『美のはかなさと芸術家の冒険性』久野昭訳（理想社）1964年、5-60頁。

18 （KSZ, 2, 219-220）や「日本詩の押韻」（KSZ, 4, 223-513）等を参照のこと。

19 Beckar、同書、原書37-38頁、邦訳書49-50頁。

20 （KSZ, 2, 220-221）

21 神の権威によって真理が規定されていた中世が念頭に置かれている。「抽象」「純粋」「絶対」の旗印の下で近代的個人は神の権力から離反するのである。「思想的危機における芸術ならびにその動向」（NMZ, 2, 46）

22 ほとんど同じ意味であるが、このことは1951年の『美学入門』では古代ギリシアの技術・模倣・普遍的実在は近代に天才・独創・唯美に転じた後、放恣・孤立・非真実に陥ると言い換えられる。『美学入門』（NMZ, 3, 88）

23 （NMZ, 2, 45）

24 中井の言葉だと「大衆」（NMZ, 2, 47）である。

25 （NMZ, 2, 49-51）

26 例えば『美学入門』では機械主義を批判する芸術家を列挙し、その主張に理解を示している。（NMZ, 3, 136-138）

27 （NMZ, 2, 55-57）

28 本論では「委員会の論理」における技術の定義を参照した（NMZ, 1, 85-87）。なお技術について中井は同様の主張を1930年ごろから『美学入門』に至るまで繰り返し述べている。

29 「実践について」（NMZ, 4, 199）

30 九鬼の著作が現在でも比較的多くの読者を得て、様々に論じられている一方、中井の思想の研究はそれほど多くない。現代日本の哲学は九鬼の試みた個人の偶然的な生を捉える方向へと深化する一方、中井が志向したような集団の哲学への関心は高くない。中井が考えていたほどには集団主義の時代は到来していなかったのである。しかし個人へと寄り添った上で、もう一度組織論を顧みる必要がある。九鬼の個人主義と中井の集団主義の両方を研究し、新たな社会モデルを探求しなければならない。

参考文献・資料

九鬼周造、中井正一のテキストは以下のそれぞれの全集を参照している。

九鬼周造

1980-1982『九鬼周造全集』岩波書店。

中井正一

1981 『中井正一全集』美術出版社。

九鬼のテキストからの引用は（KSZ, 巻数, 頁数）で、中井のテキストからの引用は（NMZ, 巻数, 頁数）で示した。なお引用に際しては新字・現代仮名遣いに改めている。

小浜善信
2006 『九鬼周造の哲学：漂白の魂』昭和堂。

日本聖書協会
2018 『聖書　聖書協会共同訳―旧約聖書続編付き』日本聖書協会。

根無一信
2017 『ライプニッツの創世記：自発と依存の形而上学』慶応義塾大学出版会。

ライプニッツ，ゴットフリート・ヴィルヘルム
1991 『ライプニッツ著作集第Ⅰ期第7巻　宗教哲学『弁神論』下』下村寅太郎・山中信・中村幸四郎・原亨吉監修、佐々木能章訳、工作舎。

ライプニッツ，G. W.
2013 『形而上学叙説　ライプニッツ―アルノー往復書簡』橋本由美子監訳、秋保亘・大矢宗太朗訳、平凡社。

Becker, Oskar
1963 *Dasein und Dawesen*. Pfullingen: Neska.

（ベッカー，オスカー 1964 「美のはかなさと芸術家の冒険的性格について―美的現象の領域での存在論的研究―」久野昭訳『美のはかなさと芸術家の冒険性』理想社。）

Bergson, Henri
2016 *Histoire de l'idée de temps: Cours au collège de France 1902-1903*. Paris: PUF.

（ベルクソン，アンリ 2019『時間観念の歴史　コレージュ・ド・フランス講義　1902-1903年度』藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳、書肆心水。）

RESEARCH ARTICLE

From Creation to Co-creation : Leibniz, Kuki and Nakai

ODA Kazuaki

Abstract

In the philosophical academy, talk of creativity has tended to focus on the individual. I would like to argue for a shift of emphasis to co-creation—the sustained, collaborative effort of a number of people concentrated on a common task. I begin by contrasting the views of G. W. Leibniz and Kuki Shūzō.

In his *Théodicée*, Leibniz lays out his paradigm of creation as an almighty God fashioning the "best of all possible worlds." Despite all the unhappiness in our lives, from God's point of view, the world could not be better than it is. The idea of God responding to the pleas of human beings to improve their lives, or of human beings affecting the workings of divine providence, is alien to his way of thinking.

Kuki, in contrast, sees the idea of God creating a perfect world is fundamentally flawed, because creation, by its very nature, is contingent and imperfect. The most one can expect from the divinity is to sympathize with human beings in their lot; to change it is beyond even the reach of God. Our pursuit of happiness begins by resigning ourselves to contingency and creating what beauty we can. Although stressing the social nature of the individual, the idea of collaboration in the creation of beauty does not figure in his idea of "encounter with the other."

Nakai Masakazu approaches the question from the opposite end of the spectrum. In place of the solitary individual, he begins from what he calls "the collective subject." True creativity is grounded, he argues, not in the extraordinary genius of a single person but in collaborative performance, and this requires concerted efforts to organize people into creative units that can hold their own against rugged individualism and totalitarian fascism alike. I am persuaded that his concept of the collective subject can guide us toward a more comprehensive philosophy of co-creation.

Keywords : Co-creation, G. W. Leibniz, Kuki Shūzō, Nakai Masakazu, "Best of all possible worlds," Contingency, Encounter, Beauty, Collective subject, Technic